米国・サスクェハナ大学に長期交換留学

英語コース　鈴木　駿介（経済4）

「今までの人生で一番勉強したと言える一年にしたい」。それが私の今回の留学に対する思いでした。その思いを実現するため、交換留学先のサスクェハナ大学では前期と後期で大きな2種類の挑戦をしました。

前期では「量」を意識した挑戦として、ビジネス統計学など5科目を履修しました。五つの授業を履修したことによって60分以上の授業が週16回となりましたが、私の英語力は米国大学での授業を十分に理解できるレベルに達しておらず、大きな挑戦でした。良い結果を残したいという強い思いから、わからないことがあればすぐに教授や友人に質問し理解を深めようと努力しました。そんな中でも、前期はフラタニティ（男子学生の社交クラブ）へ参加するなど友人と交流するための時間作りを忘れませんでした。

▲　プレゼンテーションをする鈴木さん

「量」と「質」への挑戦が自信に

後期は「質」を意識した挑戦をし、サスクェハナ大学で最も難しいクラスとされているビジネス戦略などの授業を受けました。このころには日常会話に支障がないほどに語学力も成長していましたが、それでも授業は完全に聞き取ることはできません。また、ビジネスの知識もあまりない私が現地の学生と共にビジネスについて学ぶことは大きな挑戦でした。その挑戦で成果を上げるため、教授や友人への質問はもちろん、予習復習、教科書の先読みなどを実行しました。

また、毎週のプレゼンテーションには毎回10回以上の練習をして臨むなど、毎日夜の3時まで眠れぬ日々が続きました。その授業内で行われた経営シミュレーションでは私の必死に努力する姿勢から仲間の信頼を得ることができ、チームリーダーとなってメンバーと協力して優勝することができました。また個人的な成果として、同授業で約50ページの研究論文を書き上げました。

それらの努力が報われ、秋と春の学期を通してサスクェハナ大学の成績優秀者（Dean's List）に選ばれました。これらの経験は私に自信を与え、精神力を鍛えてくれた忘れられないものとなりました。

カナダ・マウントアリソン大学に長期交換留学

英語コース　夏谷　美咲（文4）

みなさんは「メルティングポット」と「モザイク文化」と聞いて何のことを指しているか分かりますか。文化、人種のるつぼを意味する前者はアメリカ文化を、人種や文化が混ざり合っているが〝個々が見える〟後者はカナダを象徴する言葉。この二つの文化の違いを肌で感じた人。専修大学の約2万人に比べ、少人数で授業を受けることができます。教員との距離が近く、町の人ともすぐに仲良くなることができます。

▶　前列中央が夏谷さん

文化の違いを理解する大切さ

私は冒頭の疑問の答えを見つけるために、カナダに関する文化、歴史、文学などを学び、主に文化を学術的観点で学ぶ授業を履修しました。

一番大変だったのが論文を書くことでした。日本語でも3年間で5種類の課題を書いただけですが、カナダでは半期で20種類の英語の論文をこなしました。その時にお世話になったのは、論文の添削指導をしてくれるライティングリソースセンターです。さらに指導教授に、どうしたらより良い内容になるか、何度も相談しました。

日本文化が外国ではどのように受け入れられているのだろうかと、空手クラブの活動に参加しました。空手は初めての挑戦。クラブのメンバーと一緒に昇級審査や大会に参加して、個人の部と団体の部で優勝しました。特に団体戦ではメンバーと練習時間外も集まって練習したので、優勝した時の達成感は一生の思い出になりました。

みなさんもカナダ文化がどのようにアメリカ文化と違うのか、肌で感じてみてください。

海外留学体験記

米国・カナダ・メキシコ・中国

昨年度の長期交換留学、中期留学の各プログラムに参加した4人の学生たちの体験記を紹介する。現地の大学での授業参加や文化交流など留学にかかわるさまざまな体験を寄せてもらった。

※本学の国際交流センターは、国際交流協定校17カ国・地域21大学▽国際交流組織間協定校3カ国6機関▽研修校4カ国5校をもち、活発な交流が行われている。

メキシコ・イベロアメリカーナ大学に中期留学

スペイン語コース　堀地　萌果（経済4）

「やっぱりやめよう」8月2日、出発まであり。しかしチケットは準と4日と迫るなか、4カ月分の荷物を入れるスーツケースはいまだに空っぽ、何が必要かもわからず怖くなり逃げ出すことだけを考えていました。自信がなく勉強もはかどらず、不安は募るばかり。しかしチケットは準備され、逃げることは不可能なところまできていました。

「Moeka!!」。13時間は私のホストファミリーで、イベロアメリカーナ大学に通う21歳。あいさつもそこそこに、気付くと私はカリーナを質問攻めにしていました。

「なぜ道路でジャグリングをしているの?」「どうして今クラクションを鳴らしたの?」ありとあらゆることを質問し、五感がフルに働くと不安は消え、好奇心であふれました。

▲　メキシコ留学中の堀地さん（左）

空疎な出発日と充実の帰国日

最初は家の鍵の開け閉めもできず、3時間かかって家の戸締まりだけを練習しました。タクシーを自宅まで呼ぶのに言葉が通じず、何度も電話をかけ直されました。しかし2カ月後には、遅刻したタクシーの運転手にとびっきり強烈な言葉を浴びせるまでになっていました。

大学で「無理だ」と言われたことでも何でも挑戦しました。実験室での授業には白衣とブーツが必要だと言われたら、借り物競走のように学校中の研究室を走り回りました。毎日がイベントだらけで刺激的でした。

そしてあっという間に帰国日が迫っていました。もしできるならばこのままメキシコにとどまりたいとまで思いました。帰りのスーツケースは、上から押し付けても閉まらないほどにふくれ上がっていました。

中国・上海大学に中期留学

中国語コース　佐川　智紀（経済4）

昨年9月から今年1月まで、中国の上海大学で学びました。たったの1カ月30日ですが、振り返ってみると、そのいわば教科書の中だけの学問だった中国語が、そこで生きるための必須条件になったのだとこの環境の変化は、これまでのような短い時間の中では得られない経験をしました。

▶　最後列右から2人目が佐川さん

さまざまな国の友を得た喜び

授業のみならず、同級生との雑談や街での買い物も、すべてに中国語が必要だったため、毎日の生活すべてが中国語の勉強となりました。はじめは、事前に内容を考えておかなければ何も伝えることができなかったのが、まだまだ拙いですが、その場で臨機応変に相手の言葉に対する受け答えや会話ができるまでになりました。

さらに会話力を伸ばし、相手に伝わる中国語の習得を目指し、勉強を続けています。

また、今回の留学では自分の交友関係も大きく広がりました。それも中国人のみならず、クラスメートのドイツ人や韓国人、イギリス人やマダガスカル人など、さまざまな国の友人ができました。日本で普通の学生生活を送っていたら出会えなかった国籍の人たちと、一緒に中国語で雑談しながら小龍包を食べるという経験は少し奇妙な、しかし本当に楽しかった思い出となりました。

留学中は楽しいことばかりではありません。むしろ楽しかったことよりもつらかったことのほうが多かったかもしれません。しかし、つらかったとしか思えない経験も、これからの長い人生の中でいつか自分なりの意味を持つのだと信じています。

そしてこの留学を支えてくれたさまざまな人たち、また、留学に行くと決意したあの時の自分に感謝したいです。